12)　グローバリゼーション部門

空井　護（教授・現代政治分析）

⑴ センターの部門に関連した研究活動およびそのアウトプットについて。

研究期間制度にもとづく研究期間を申請・取得し，次項記載の自らの研究活動に専念したため，グローバリゼーション部門に直接関連する研究活動およびそのアウトプットはない。

⑵ 自身の研究活動およびそのアウトプットについて。

ここ数年来，現代（間接）デモクラシーを古典（直接）デモクラシーの欠如態としてとらえるのではなく，一貫した構成原理に支えられた，それなりに「立派な」政治体制として理解するための，説得的なロジックを発見することを，最大の研究課題として自らに課している。しかし，これまでさまざまな補助線について検討を加えてきたものの，政治的決定への到達（「入力」）過程に視野を限定しているかぎり，十分な成果は期待できないとの結論に傾いてきた（よって今では，既発表の拙稿，たとえば「現代民主政 1・5――熟議と無意識の間」〔『アステイオン 77』，2012 年〕などにも，重大な限界があると考えている）。そこで，2013 年度においては，「入力」過程の態様を政治的決定（「出力」）の特質によって正当化する可能性，より具体的には，現代デモクラシーのもとでの政治的決定の市民に対する間接性が，政治的決定への市民関与の間接性を要請するという，いわば「間接性の対称」とでも呼ぶべき関係の成立可能性を探ることに，研究活動の重点を置いた。そのさい必要なのは，政治的決定の拘束対象を政府に限定して市民に及ぼさないような解釈，あるいは H・L・A・ハートがいう意味での「権威的 authoritative」な理由（reason）として政治的決定を受け止め，それにしたがって自ら行動し，あるいは市民の行動の是非を判断し，ときに市民に行動範型への同調を強いる，そういう人的集団としての政府理解である。行政的決定はもとより，立法的決定も厳密には市民ではなく政府（のみ）を義務づけるという，哲学的アナキズム（philosophical anarchism）すれすれのかかる政治的決定理解については，本報告者は 2013 年度内にはその正しさを十分に確信するには至らず，遺憾ながら自らの考察をアウトプットに結実させることができなかった。とはいえ検討を進める過程で，たとえば古典デモクラシーの起源たる古代ギリシアのデモクラティアにおいて，市民が民会の構成員であるとともに，軍人で，役人で，判事でもあった（あるいは，その候補者であった）という周知の事実（そして，たとえば J-J・ルソーにおいて，「デモクラシー」とは「政府」のひとつの形態の謂いであったという，これまたよく知られていながら十分な注意が向けられることの少ない事実），あるいは初期の R・ダールがポリアーキー（polyarchy）の特質を，能動的な少数諸派（active minorities）に対する政治的決定（者）の反応性（responsiveness）のうちに見出していたという，やはりごく常識的でありながら軽視されやすい事実が，理論的には意想外に大きな意味をもちかねないことに気づくことができたのは収穫であった。

(3) その他 (教育活動ほか)

研究期間制度にもとづく研究期間中，もっぱら日本国内で研究活動を行ったため，2013 年度の前期，法学部において講義「現代政治分析」（4 単位）を担当した。

論文

論文標題	雑誌名	発行年	頁
「書評　際立つ大胆さ　Rieko KAGE, *Civic Engagement in Postwar Japan: The Revival of a Defeated Society*」	『レヴァイアサン　52　〔特集〕変革期の選挙区政治』（木鐸社）	2013 年	166－170 頁